

---

# 呪われてる王子様。

眠井

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪われてる王子様。

### 【Nコード】

N8072Y

### 【作者名】

眠井

### 【あらすじ】

呪われてる王子様と呪いを解こうと奮闘する歌えない吟遊詩人の話。  
ハートフルボツコメディ目指してます。

王子が部屋から出てこない

私が見たものを表現するのは、少し難しい。

王城の東側に位置する王子の私室は、広いのに驚くほど殺風景だった。

数少ない家具も元は上等なものようだが、今では無数の傷がつき、見る影も無い。

殺伐としたこの部屋は、持ち主の心象風景そのままなのだろう。

敷物すらない床を眺めれば、まるで獣が暴れたようなひび割れだらけだ。

しかし他にも部屋も廊下もきちんと整備されていたし、

ここの部屋だって、別に地下牢でも監禁部屋でもないのに。

目の前で長々と話し続けていた声が止まった。

肩を押され前へ押し出される。

「海を越え、遙か彼方からやって来たと自称しておりますので、殿下の無聊を慰めるのに少しは役には立つでしょう」

面倒で下げていた頭を更に低くし、うやうやしく口上を述べる。

ここら辺は、飯の種なので手馴れたものだ。

「私は各国を巡りまして、様々なものを見聞しております。このよ  
うな声ではありませんが、様々な物語を存じておりますし」

大事に抱えていたリユートを少し鳴らす。

「歌や踊りに相応しい音楽を数多く学んでおりますので、お楽しみ  
いただけるかと」

返事の代わりに重い溜息。

浅い、せわしない呼吸音が気になり、顔を上げる。

王子、と呼ばれているだけあり、着ている布地は上等なものだ。

黒と灰を基調としている・・・若い男にしては老熟した服装だと  
思うが。

目許は落ち窪み、頬はこけ、顔色は服の色とあいまって黒っぽい。

あまり具合が良くなさそうだが、何の病だろうか。

答えはすぐに出た。

服から形が浮く足がどう見ても尋常の太さではない。

細すぎるし関節の位置もなんだか妙だ。

以前、居た隣国で聞いた噂話が信憑性を帯びてきた。

この国の王子は、魔女に呪われ、怪物のような姿をしている。

王子の成人祝いの席で、招待された魔女を怒らせ公衆の面前で呪われた姿にされ、

王は国中どころか近隣の学者、賢者、魔女の類を呼び寄せ、呪いを解いたものに莫大な褒賞をとらすと触れを出したが、呪いは解けず、それどころか新しい試みをする度に呪いの種類はかわり、呪いは今でも王子の身を苛んでいる　と。

事実だったようだ。

ところで、私を連れてきた大臣は、骸骨のような、いかにも演劇に出てきそうな悪役的風貌をしている。

ちなみに大臣の奥方は、往年は大変な美女であった事を思わせる風貌だったので、ギャップが激しい。

にもかかわらず、大臣は思わせぶりな台詞も言わず、胡乱な返事をする王子をよそに、私にしっかりやれといいつけ部屋を出てしまった。

何の含みもなく、事務的な話しかなかった。

まったく、古典的なほど演出的容貌に優れているのに

なんとということでしょう。

コレでは面白い話にならないではありませんか。

とはいえ、この国は大陸の大半を配下に収めている帝国の配下にあるような小国。

城もそれほど大きくなく、地方領主といってもいいくらいだ。

そんな野心があれば、とくに他の国へ行っているのかもしれない。

あれこれと思索していると、王子から声が掛かった。

「もう用は無いから、帰っていいぞ」

「どこへ？」

王子は、喋るのも億劫という様相。

慌てて椅子を引っ張ってきて勧めると、崩れるように座り込んでしまった。

大臣の前なので、見栄を張っていたのか。

辛そうに呼吸をしている王子を見ているのも忍びなくて、リュートの弦を指の腹で撫でる。

攫われて数年、奴隷として過ごして故郷に文を送った事もあったけど、なんの応答も無く望みは潰えた。

毎日の稼ぎが足らなくて殴られる日の方が多くなってきたから、もうすぐこれも取り上げられる事になっていて

あの時、あの街角で大臣の馬車の車軸が外れなければ・・・

「私は大臣様にお買い上げいただき、王子様のお傍に仕えるよう申し付けられておりますが」

王子は一瞬瞑目し、息を吐く。

「この国は奴隷制度を廃止している。よってお前は今から自由の身だ。家に帰るといい」

王子の瞳の色は黄色い。

見世物として檻の中で諦めたように蹲っていた狼の瞳と同じ色。

髪は白と灰色が入り混じった不思議な色合いをしていて、肌は少し白味が多い。

きつとずっと部屋の中にいるからだろう。

あの狼は、二日後死んだ。

「そうおっしゃいまして」

今着ている服だって、大臣、というか奥方と侍女が見かねて用意してくれたものだ。

「大臣様のご好意もありますので、いかがでしょう。数ヶ月、いえ、数週間お傍で仕えさせていただきませんか？」

私にも見栄があるから、銅貨の三枚しか持っていないとは言えない。

ここで追い出されても右も左もわからないこんな山奥の小国では、日銭を稼ぐのも一苦労だ。

奴隷のままなら、一応衣食住は保障されていたのだけど。

いや、そうでもないか。当初はともかく、この半年ほどはひどいものだった。

「わかった。そうしよう」

大臣の機嫌を損ねるのは問題だと王子も気がついたらしく、あっさり許可が出る。

確かに安くはない金を払って娯楽を提供されたのに、いきなりでは善意も台無しだ。

王子はとても疲れている様子なので、私はお茶をもらってききます  
と行って外へ出た。

## 王子が部屋から出てこない（後書き）

お読み頂きありがとうございます。こんな感じで行く予定ですので  
よろしくお願ひします。

## 吟遊詩人は唄えない

部屋の外でうろろろしていると、女中らしい淡い色のエプロンドレスの少女を見つけた。

軽く自己紹介をして、調理場までの案内を乞う。

幸い、まだ忙しい時間帯ではないらしく微かに話し声が聞こえた。小間使いに礼を述べ、声を掛けてから中に入る。

恰幅の良い中年男性は、理長だろうか、それから同年代くらいの女性、幼い子供が二人。

おそらく火番か、雑用係だろう。

眼を丸くしている四人に軽く挨拶と自己紹介をしてから用件を述べる。

「王子にお茶と、何か食べ物をもって行きたいのですが」

「王子に!?!」

がたんと椅子を鳴らして、女性が叫ぶ。

ちょっと、びっくりした。

長々と調理場で拘束されてから部屋に戻ると、王子は疲れた様子で椅子に腰掛けていた。

隣には侍女が立ち、お茶の準備をしている。

なんか、部屋が豪華になっていますよ?

どこから持ってきたのか、あの殺風景だった部屋には花が飾られ、更に洒落たテーブルと椅子、ソファークッションも絨毯も完備されている。

さすがに壁にはまだ何も無いけど……。

圧倒されつつ、両手に持っていた盆をそつと下ろす。

これでもかと盛られた果物と甘そうなお菓子、焼きたてのものもある。

お茶を優しげな顔をした侍女が、嬉しそうな顔をして私にも勧めてきた。

良いのだろうかと王子を見ると、椅子を示してくれたのでありがたく腰掛けいただく。

この準備をする為に調理場で長く待たされていたのかと納得。侍女は、物凄くいい笑顔で食べ物王子と私に取り分けてくれた。

予想以上の高待遇……あ、いや、もしや毒見では無いだろうかと思いつつ、湯気を立てている平たいパンを二人の顔を確認してから食べる。

ふわふわして、美味しい。

網目状に焼かれている丸い菓子は、表面がさくつとして中は甘い。

干し葡萄に、……細かい袋状の赤い果物。

売られているのは見たことがあるけど、食べるのははじめてだ。人心地ついた所で、王子を見るとじつとこちらを見ていた。

……やはり、毒見だったのかと思いつつ、残り僅かになった果物を飲み下す。

「どうだ？」

「どれも物凄く美味しいです！」

予想以上に語尾を強調してしまった。

笑みをこぼす二人に羞恥を覚え、顔を俯かす。

「蜂蜜をかけると、もっと美味しいですよ」

そう侍女は言つと、私の皿に平たいパンを追加し、王子と私の皿のものに蜂蜜を掛けた。

さすが王宮だ。蜂蜜も透き通っていて、高級品である事が伺える。甘さで口がとろけそうだ。

「王子、凄く美味しいです食べなくては損です！毒は入っていません！」

つい余計な事まで言ってしまったけど、口の端が緩んで仕方ない。

こんな美味しい食べ物は何れ位ぶりだろう。淹れたてのお茶のなんて香りの高いことか。

王子は手元の皿を眺め、手をつける様子がない……なんということでしょう。

「さめたら美味しさ半減ですよ？さあ、どうぞ！」

そういつて、私はフォークを差し出した。

王子より先に食べる方が失礼だと気がつくのは、その少しあとの事である。

空っぽのお皿を片付けるのを手伝い、侍女と調理場まで行くと色々な人から背中や肩を叩かれた。

今までこんなに歓迎された事があつただろうか。否ない。

こんな大勢から一度に親切にされるなんて・・・後で悪い事でもあるのではと思つてしまい、自分を戒める。

部屋を案内され着替えなど用意してもらい、ついでに細々とした説明をつける。

日の当たるいい部屋だそうなのでありがたい。

当然ながらベットと机だけの小さな部屋だが居心地は良さそうだ。リユートを置き、周囲を見回すと日用品と数枚の服、それに一輪の花が飾られていた。

淡い黄色の花の心遣いに、胸が熱くなる。

王子は呪われて以来、滅多に部屋から出てこない。

料理長達の話によれば、以前の王子は親子関係は良好、学友である騎士達とも仲がよく、社交的で、国民にも慕われる人物だったそう、呪いを受けてから、人の目を恐れすっかり引きこもり、呪いをとく為にさまざま・・・奇妙な薬や液体を飲むとか、をした結果、食事も喉に通らなくなつてしまつたらしい。

奇妙な液体や薬に関しては、注文を受けた副料理長がげんなりとした表情で教えてくれたのだが、あまり語りたくは無い。

体が不要と判断したから出したものを取り込む理由が思いつかない、とだけ言つておこつ。

特にここ何ヶ月は殆ど食事をとらなくなっていたそうで、だから料理人達はああいう対応だった、らしい。

私は確かに王子の良い憂さ晴らしになったようだ。

夕食の刻限までふらふらと城の中を歩き回り、場所の把握に努める。

あまり大きな城ではないので、注意していれば、初めてでも迷う事はない。

地味で質素、だが手入れは行き届いているので居心地がいい。

使用人達の顔も卑屈な感じはしないので、治世がいいのだろう。

ほどほどで切り上げるべきだと判断し、リユートの位置を微調整しながら廊下を歩いてみると、前からお仕着せ姿の若い男性が物凄い勢いで歩いてきた。

背、高いなあ・・・目が合った。

「あッ楽士！」

カツカツと勢いよく詰め寄られ内心少し、引く。

黒を基調としたお仕着せに浅黒い肌に短い濃茶の髪が剣山のごとく突き立っているの、あまり勢いよく来られると軍馬に寄られるみたいだ。

「なんでしょうか、えー・・・」

「クラウディオ王子の従者を務めるアダンだ。王子に関することから何でも俺に訊け！訊いて下さい。むしろ俺が訊ねたい。どうやっ

て王子に食事摂らせたんだ!？」

両手を掴まれ勢いよく上下に振られ困惑する。

「そんな大層な事じゃなくて、お茶頂いて私と一緒にお菓子を食べてだけで・・・」

「なんだつまらん」

いきなり手を離され、バランスを崩してよろめくと、襟首を掴まれた。

「ドジだなあ、お前」

なんだろう、この気持ち。

「楽士、お前もちゃんと食べてるのか?よし、一緒に食べに行くか」!

勝手に自己完結しましたよこの人。

小動物のように襟首を掴まれず引つ張られる私を、通り過ぎる使用人達は生暖かな眼差しで見守っていた。

見てないで、助けて。

## 従者のアダンが働かない

結局、あのあとほぼ一晩中、従者アダンによる王子自慢され、情報収集の代償に睡眠を削られふらふらしながら水場に行くと、あの優しい笑顔の侍女が心配してくれた。

彼女の名前は、ベル。

榛色の瞳に穏やかな性格で、あまり口数は多くないようだ。と思うのは、アダンさんの口数が多すぎるせいだろう。

比較対象、間違えた。

「悪い人じゃないんだけど、ちょっと暴走するのよね」

そういつて笑う。

私も曖昧に返し、城門の方から現れた騎馬姿に眼を凝らした。朝の警邏だろうか。

泥だらけの馬と泥だらけの兵士が最後尾についている。

馬は暴れ足りないのか、手綱を持っている方は振り回されて大変そうだ。

なんとなく、連想が繋がる。

「なんか、馬みたいですね」

「ホント、馬並みのよね」

顔を赤らめて言われても、困るんですけど。

美味しい朝食を食べ城内を散策していると、例によってアダンさんに遭遇し、今度は王子の部屋まで連れて行かれた。

執務中に大人しい曲でも奏でているという事らしい。

机に書類を載せ黙々と仕事をしている王子を邪魔しないよう、端っこに椅子を寄せ、『白い犬とワルツ』という曲を爪弾く。

王子の横に立ち、書類に関してあれこれ説明している事務官らしき男性・・・名前は後で聞いておこう、が軽く頷いたのでそのまま続ける。

激しい曲ではないから、邪魔にはならないだろう。

最後の調べが終わり顔を上げると、人が増えていた。

みなさん方、お茶を片手にお菓子を食べている。

「次はもっと華やかな曲がいいな。『黄色いネズミ』とか」

一時期流行した子供受けする曲を上げるアダンさんに、ベルさんがそれなら『風谷の姫君』がいいと異議を唱える。

事務官は机の上を片付けながら、『最後の夢』を聴きたいと控えめに主張。

王子は面白そうにこちらを見ている・・・。

「大臣は良い掘り出しモノをしてくれたな」

思いがけない言葉に頬が熱い。

ベルさんが手招きしてくれたのでテーブルにつくとお茶とお菓子をお勧められた。

「歌も聴きたいよな、その喉は、一体どうしたんだ？変声期？」

王子はお茶しか手にしていないので、私もお茶だけにしておこう。

「怪我です」

指まで折られなかったのは、幸いだった。

「お医者さんには診てもらった？治るの？」

ベルさん、顔近いです。

「象牙の船と銀の櫂があれば治るでしょうね」

あのしみつたれが医者に連れて行くのは、余程稼ぐ見込みがなければまずありえない。

風邪をこじらせ、翌日には冷たくなっていた姿は忘れられない。

ああ、本当にいいお茶だ。

あの子にも、飲ませてあげたかった。

王子が一人になりたいというので、私達は部屋の外へ出た。

例によってアダンさんに引っ張られ、衣裳部屋へ向かう。

従者とは、王子の服を揃えたり、食事の手配や本人の要望を叶えたりする何でも屋、らしい。

お付の侍女みたいなものだろう。

もつすぐ収穫祭の時期なので、寒さに備えたものを用意するのを

手伝うのが、どうやら私の仕事らしい。

まあ、いい。

暖かな衣裳部屋で、衣裳係を呼んでみんなであれこれと物色する。王子には、暖色の服が必要だと力説したが、あいにくどれも暗い色合いばかりなので、後日仕立て屋を呼ぶ事で決着をつける。

ついでに王子の母、今は亡き女王の時代に居た吟遊詩人が使っていたという上等な服や羽根飾りのついた帽子、先の尖った靴などを見せてもらう。

どうやら随分体格のいい人物だったらしく、アダンさんが着ても横幅が余るので仕立て直して貰える事になった。

つまり、しばらくは用意してもらった小姓用の服のままだ。

貴人に仕える小姓の服だから、仕立ては良いし実用的なので私はこのままでも構わないのだが。

そう言うと、アダンさんは口をへの字にした。

「もうすぐ色々な所からお偉いさんが集まってくるだろ？その時に、小姓が楽器持つてうろついてたらサボってるように見えるだろうが」

確かに。

私が納得していると、衣裳係が不満そうな表情になった。

「個人的には可愛いからこのままで全然構いませんけど！てゆうか！ここやっぱり潤い足りません。なんとかして下さいアダンさんっ」

たくさんのお衣裳を抱えた女中達がいつせいに頷く。

「王子に小姓とか見習い従者を仕えさせるように伝えて下さいよ。」

騎士見習いはみんな巡回訓練行ってるし、つまんないです」

「巡回訓練？」

朝方見た騎馬隊の事だろうか？

余程不思議そうな顔でもしてたのか、女中達が競って教えてくれたところによると

始まったのは三代ほど前の女王の頃、元々山岳部族の寄せ集めであるこの国は、帝国が戦をする際には兵士を召集し出兵するのだが、山々に散らばり集落単位で生活する人々から召集するのは、困難な事だった。

何故なら遊牧をする部族あり、占いによって住む地を変更する部族ありで、同じ場所に留まっている可能性が低く、山を降りてこなければ知らせひとつも届かない。

それだけではなく、疫病が流行し集落どころか部族ごと全滅しても、誰も気がつかないという事もありえた。

それらを防ぐ為、騎士複数、医者に教師、ついでに商人が小隊を作り、定期的に各集落を巡回し知らせを持って行っているそうだ。

教師が居るのは、部族ごとに言語が異なるため共通語として帝国語を使っているのだが、帝国語が出来れば出兵しても生存率が上がる為らしい。

例えば、部隊はおおむね出身国ことになるが、戦場ではぐれた場合、言葉が通じない辺境部族兵の帰還はほぼ絶望的だ。

最悪、帝国領土内で敵兵として殺されかねない。

「医者もそりゃ帝国帰りつてワケじゃないけど、産婆が居ないような小さい集落には十分だからな」

そして騎士が居れば、危険な獣や山賊に対する行動が取れる。

「女王様凄いですね」

素直に感嘆すると、私以外全員が一斉に誇らしげな表情になった。

「ウチの王様達は凄いだよ。ちゃんと俺達の事考えてくれてるし、帝国の奴等みたいに嫌味じゃないしな」

アダンさんも兵役の一環で帝国へ行った事があるそうだ。

確かに帝国は身分制度が厳しく、このように大らかな人々には居心地が悪かったのだろう。

歓談していると、女中頭にサボるなと怒られ衣裳部屋を追い出された。

事実なので平に謝る。

アダンさんとふらふらと歩いていると、暇なら手伝えと言われ調理室で芋の皮を剥く事になりかけたが、指を怪我したら困ると言うのと銀食器を磨く事となった。

これも従者の仕事に含まれるのかと訊ねると、そんな訳がないだろうと応えられた。

「王子が部屋に引き籠もってる限り、客は来ないし、俺の仕事なんかほとんど無いんだよ」

自嘲的な表情でそう言うと、スプーンを「ごしごし」と磨く。

「呪いを掛けられたあとはみんなで色々試したんだ。魔法使いや賢者っていろいろを帝国から呼んだりして、けど全部無駄だった。乙女の口付けってのも試し・・・ベルの妹に小遣いやって頼にしてもらっただけだから、そんな眼で見るなよ」

私は息を吐いてフォークを手に取る。

磨き粉の臭いが鼻につく。

「そういえば、王子の呪いって解呪が失敗するたびに変わると噂では聞きましたが、本当はどうなんですか？」

あの服から浮き出る異様な細さを思い出しながら訊ねると、アダソンさんは複雑そうな表情になった。

「最初は、本当にバケモノの姿になったんだ。下半身だけな」

「半分だけ？」

痛々しいものを見る表情を浮かべ、手元のナイフを磨く力を込めている。

「その時は祝いの席だからって、大勢居たどっかの貴族とか領主とか国の使者とか、みんな悲鳴を上げて王子から逃げた。王子の婚約者は失神してたよ。」

そのあとすぐ、婚約は解消された。あの日は、あいつの誕生日だったのに」

悲しそうにそう言った。

「招待客の魔法使いが呪いを解く呪文を使ったら、今度は下半身が熊そっくりになって、司祭が祈りを捧げたら馬になった。」

魔女はそれを見て大笑いして正門から歩いて出て行った。一生忘れられないだろうな」

メイドの笑顔が笑ってない

夜半、食堂で演奏していると、険しい表情を浮かべたベルさんがやって来た。

王子に呼ばれているのだろうかと思っただが、そうではないらしい。

「王子の近くで、『三日ぐらいご飯食べてません』という顔してご飯食べてくれればいいから」

「さ、さっき晩御飯頂きましたが・・・」

予想外の言葉にどきまぎしていると、笑顔のまま両肩を掴まれる。

「『三日ぐらいご飯食べてません』という顔して、王子と一緒にご飯食べてくれればいいから」

ガクガクと頷くと、ベルさんはブーイングする聴衆を舌打ち一つで黙らせた。

「じゃあ、行きましょうか」

私はこの城に居る間、ベルさんには逆らわないようにしようと思っただ。

王子のメニューは病人食で品数は少ないが美味しそうだった。色彩鮮やかな粥に蒸し肉、食欲をそそる野菜スープ。

なぜか同じものが私にも供される。

訝しげな表情を浮かべる王子に、私はこう答えた。

「王子がこれからお食事だと伺ったので」

王子は気の無い様子で肉を少し口に運び、手を置こうとして私を見た。

いつ見ても狼のような瞳だ。

王子がスープを口にしたので私も少し頂く。

礼儀、らしい。

主人より多く食べてはいけないし、先に手をつけるのも良くないとか。

「美味しい。ここの料理人は本当に料理が上手ですね」

王子は複雑そうな表情で給仕に徹するアダンさんを見た。

アダンさんは無表情で王子を見返す。

王子が粥に手を出せば、私も肉を少し食べる。

空になった二人分の皿を片付けるアダンさんの後姿は、実に軽やかだった。

食事を終えて疲労した様子の王子に夜に相應しい曲を静かに演奏する。

二人だけというのも、少し気詰まりなものだ。

本来はベルさんやアダンさんが居るべきだが、二人も疲れているようなのでいざとなったら誰か呼ぶと約束したのだ。

「食事をするのが嫌いなんですか？」

王子は顔を上げ、短く息を吐いた。

「そういうわけではない。ただ」

呪われた半身を見つめる表情には諦めが混ざっている。

「肉を食べれば獣に近づくような気がするし、野菜を食べれば家畜になるような気がする」

私は納得し、指を止めた。

「私の知っている限り、食事によって呪いが進行したり変化するということはありません」

食事行為で呪われるという事はあったが。

「王子、私はこんな声ですから歌う事はできませんが、知識はあります」

王子は苦く笑ったが、私はそんな風に笑う姿を見るのは嫌だと思っただ。

なんと云えばいいのだろう。

沢山の歌や詩は知っているのに。

調理場から貰ってきた酒瓶をテーブルの上に置き、杯になみなみ

と注ぐ。

「王子、お酒を呑むのは人間と龍だけですから、大丈夫です」

自分用にもたっぷり注ぎ、一気に飲み干す。

酒場で歌っていた頃は、エールが代金代わりだったこともあったな。

もう一杯飲み干す。

いい感じに気分が高揚してきた。

頭の中の知識を総ざらいする。

「基本的には、呪いは口付けで解けます。他にもありますがかなり特殊ですので、多分違うはずですよ」

恐る恐るといった風に葡萄酒に口をつける王子に断言する。

「もしかして、お酒も久しぶりでしたか？」

頷く顔は、少し嬉しそうだ。

「無垢な乙女のキスは、駄目だったんですね。確か」

処女には、魔法に対する抵抗力があるといわれている。

一角獣が乙女にしか懐かないのは、彼らも魔法を拒絶する存在だから、という説が有力だ。

「あとは、身分のある人つまり王族ですが」

そもそも王族というのは、神の血筋を引くと言われ、王の手で触れられれば病が治るなどの説もある。

王による施しで病が快癒したという話は、真偽はともかくとして  
良くある事だし。

そう言つと、王子は嫌そうな表情を浮かべた。

「叔母上と父ならもう試した。身分的には姫と王だ。それ以上は、  
もう確認できないだろう」

「もしかしたら、血族は範囲外かもしれませんが、あとは」

王子は天を仰ぎ嘆息する。

「みなまで言うな。それらに関しては、どう考えても無理だ」

王子も同じ事を考えたらしく、重い諦めが部屋に立ち込めた。

王子に他国の王子のキスを期待するのは、困難だろう。  
せめて王子が姫なら可能性はあっただろうが。

あとは、

「婚約者が居たとは伺いましたが・・・他には居なかつたんですか  
？」

今は憔悴して無残なものだけど、元々の造りは悪くないし性格だ  
つて悪くない。

隣国では嫡子以外が多くて、大変なことになっているそうだから、  
王子にも相手がいないと言う事も無いのではないかと思う。

王子は何も言わずに杯を空けたので、王子と自分のお代りを注ぐ。

「婚約者は、宰相の娘だったか歳が一つ違いでな。大臣の息子とア  
ダンの四人で幼い頃からいつも一緒だった」

悲鳴を上げて失神して婚約破棄した人か。

重すぎて何も言えず、黙って葡萄酒を味わう事に集中する。  
ああ、鼻を突き抜ける清涼感。

コックが自慢するだけがある。さすがこの国の名産品だ。

「俺など、どうなるうが構わなかったのにな。半端に呪いが解けるからこのざまだ」

自嘲的な笑い。

「叔母上は、今どこにいらっしやるんですか？」

慌てて話題を変えようとしたが、王子の表情は更に荒んだ。

「どこだろうな。呪いを解く方法を探すといって出奔したきりだ。王位を継ぐのも、子供に王位を継がせるのも嫌らしい。確かに、何もなければあの人は自由に暮らせたはずだからな」

う、酒瓶が空になってしまった。仕方ないので次のを空け、王子にも勧める。

「えと、王様に新しいえーっと、お嫌でしょうけどあの側室といいますが、あの」

王様が居るなら、新しく世継ぎを作ってもらえばいいのではないだろうか。

王子の母である亡くなられてるお后様には、悪いが。

王子は酔いが回っているのか、ぼんやりと私を見つめ、ああと呟いた。

「そもそもこの国は、複数の部族で成立している。それらをまとめる事ができたのは初代女王で、彼女は恐るべき退魔の力を持ち合わせ、呪詛による疫病を尽く退け、紛争を続けていた各部族は女王を祭り上げる事で結束した」

王子は酔いと絶望で濁った黄色い眼を撫でた。

「代が経て退魔の力が薄れても、この特徴が続く限りは部族は今の協力関係を維持していくだろうが。それ以外の人間が王になれば、この国は終わる」

はつきりと言い切る。

「今、父が王位についてられるのは、叔母がまだ若いのと母の遺功だろう」

王子は自分で杯を満たし、一気に空けた。

「あの時に全身が蛙にでもなってしまうえば、叔母が継がざるをえなくなるし、父も要らない苦勞をせずにするだのに。薄れたとはいえ退魔の力によって半分しか呪いが効かないとはな。いっそ」

そんな顔をしないで欲しい。

私に出来る事は、何だろう、そう思いながら杯を重ね、夜が更けていく。

月がとても綺麗な晩だった。



宰相ですが、この国駄目かもしれない

目が覚めたら、牢屋だった。

城の地下だろう。薄暗く、ことりもしない。

ずきずきと痛む頭を抱え、しばらく体を丸め考える。

・・・水が欲しい。

重い体を動かして檻の縁にある古びた水差しから縁の欠けた木製のマグに注ぎ飲み干すと、少し落ち着いた。

リュートが無い。取り上げられたのか。

牢屋は乾いていて、他に人の気配もない。

牢番は、きつとあの扉の向こうなんだろうと予想する。

硬い寝台に戻り、寝直す事にした。

南京虫が居ない事を祈りたい。

でもなぜ私がこんなところに。

私に酒乱の気はないはずだ。多分。

あんな上等の葡萄酒を飲むのは初めてだったが・・・うん。ないない。

ガシガシと頭を掻いていて、帽子がない事に気がついた。

嫌だなと思いつながら、髪を撫で付ける。

しばらくして、物音が近づいてきた。

聞き覚えのある声は、相変わらず騒がしい。

落ちて着いてきた頭痛が再発してきそうだ。

気持ちばかり身嗜みを整え待っていると、予想以上の大人数がやってきた。

一番背の高いアダンさんが目に入り、それから牢番なのか武装した兵士が二人、それからシックな装いをした中年女性に付き従う真面目そうな似たような服装の若い男女と・・・ドレス姿の十歳無いくらいの少女。

少女がこちらを見て走ってこようとしたが、兵士に抑えられ大暴れしている。

「アダンさん。私、何でここにいるのでしょうか、酔っ払ってご迷惑をおかけしましたか？」

返事の代わりに長い溜息が返ってきた。

「こちらにいらっしやるのは、宰相、こちらは御令嬢。こっちは二人は秘書と書記、あとお前が暗殺とか呪術とかしたら困るからすぐ手を打てる将来有望な兵士二人」

呪術を行うには名前が必要というのは割と知られた話なので、あえて伏せたのだろうと思った。

とりあえず頭を下げる。

「コレが昨晚王子の部屋に居た楽士です。リユートはこちらで預か

っています」

小刀や財布などは、隠しに入っているからまあいいか。

「王子に引き合わせたのは、フェルナンデス大臣ですね。夫人も顔合わせをしています。どうしますか？場所を移された方がいいと思いますが」

アダンさんが、有能に見える。

宰相は私を上から下までじろじろと見ると、兵士の方に軽く頷いた。

「良いでしょう。念の為、手が使えないようにして。空いている部屋で結構です」

もう一人の兵士は、未だに暴れる令嬢を捕まえておくのに手一杯なので、兵士が鍵を開けアダンさんが私の手首を掴んだ。

「仮にも楽器を扱う手です。自分が掴んでいます、いざとなればへし折りますので」

さらりと怖い事を言われたが、ウィンクを投げられ口を噤む。下手な縛られ方をするのも嫌だから仕方ないだろう。

秘書と言われた若い女性の方が先頭に立ち、地下牢から出る。

「あとで説明されるから、そのまま大人しくしてろ。な？」

「わかりました」

私は一体何をしたのか、好奇心の方が勝ってしまった。

連れて行かれたのは、テーブルと椅子のある個室だった。

調度品は壁にタペストリーが一枚と、簡素というかなんというか・  
・シンプルなのはこの国の趣味なのだろうか。

宰相と書記は椅子に腰掛け、秘書は宰相の背後に立っている。

そして私はアダンさんと兵士に挟まれテーブルの前に立って、頭痛と吐き気を堪えていた。

「大丈夫か？顔真つ青だぞ」

「・・・二日酔いです」

絨毯の上でぶちまけるのだけは、避けたい。

体が揺れているのを自覚しながら、頭痛の原因のひとつに目をやる。

令嬢はまだ暴れている。なぜ連れて来ているのか・・・。

「ピアンカ、いい加減になさい。あなたが楽士に会いたいというので連れてきたのに、迷惑ですよ」

ピタリと少女の動きが止まったので兵士がそつと下ろす。

柔らかそうな金髪は肩の下ぐらいまであり、緩やかに波打っている。

瞳は薄い緑。肌は白く、そばかすが散っているが、随分可愛らしい少女だ。

宰相はプラチナブロンドで瞳の色は同じだ。

鷲鼻の母親に似ていくのだろうかと考えると、少し不思議な気分になる。

「ごめんなさい。お母様。けどこの人、エルフなのに髪の毛黒いんだもの。瞳だって緑じゃないし、肌もミルクみたいな白じゃないわ」

無表情の秘書と、机に向かって無表情を装っている書記の肩がピクリと震えた。

「なんで耳はエルフみたいに尖っているし、楽器も使えるのにそんな変な声なの？背だってお兄様ぐらいしかないし、でも瞳の色は真っ青でちよつと素敵ね」

私は肩をびくびくと震わすアダンさんを半眼で見上げた。

兵士と目が合うと、彼はさっと目を逸らし、こちらを見よつともしない。

耳が真っ赤ですよ。

「発言しても・・・？」

「どうぞ」

宰相から許可が出たので、私は出来るだけ落ち着いた声を出そうと努力した。

「お嬢さん、私は海の向こうの国から来た外国人です。私の兄弟姉

妹も両親も祖父母も両隣ン家も大体似たり寄つたりの特徴をした人間ですので、えろふというのと混同されては、迷惑です」

「えろふじゃなくて、エルフ！エルフはね、森に住んでて弓と楽器が得意で金髪碧眼で背もすらつとしていて耳が尖っているのよ」

「そんな人知りません」

「耳尖ってるじゃない！海の向こうでも森に住んでるんでしょ？」

「ウチの一族、先祖代々海辺に住んでるんですけどッ！？」

思わず母国語で言ってしまい、全員にきよとんとされた。

相手は子供だ。咳払いして、落ち着きを取り戻す。

「残念ながら、私は森に住んでいません。お話はここまでです。あ  
と他のお話があるそうなのでよそで遊んでください」

「わかったわ。じゃあ、またね。お母様、私先に馬車に行ってるわ  
ね」

そう言っつて素直に部屋から出て行くのかと思いきや、私の服をツ  
ンツンと引っ張った。

にやっと、小悪魔の笑い。

「じゃ、またね。森に住んでないエルフさん」

「だから違っつてー！」

反論は分厚い扉に跳ね返され届かなかった。

「さすが、フランススカの妹。ぶっちぎりだな」

アダンさんが呟くと、宰相が眉間にぎゅっと皺を寄せた。

「あの娘、最近上げた本にすっかり夢中になっていて、不愉快な思いをさせて御免なさいね」

意外な言葉に思わず首を横に振る。

「アレくらいの子供には良くある事です」

器量があまり良くないと思っていた宰相だが、微笑むと案外美しい人だと気がつく。

「さて、あなたには何点が質問があります。場合によってはそれ相応の刑罰が処せられますから、よく考えて答えて下さい」

真剣な声色に頷き、背筋を伸ばした

最初に聞かれたのは、夕食のあとの事だ。

隠す事もないので、調理場でお酒を貰い二人で飲んだ話を話す。

その際は副料理長が居たので問題はないだろう。

それから話していた内容は呪いを解く方法についてである事、美味しいお酒だったので飲み過ぎたと思っっている事、目が覚めたら牢の中だった事まで言うと、疑わしそうな表情を浮かべられた。

「他に魔法に関わるような事とかしませんでしたか？」

「酔って手頃な曲を弾いたかもしれませんが、素面でもないのに魔法に関わるような曲が弾けたとも思えません」

魔法の一種である魔曲が無いわけでもないが。

「あなたがエルフなら無意識に魔法を使ったという可能性はあるのかしら？」

「そもそもエルフというのが何かかも知りません」

首を横に振ると、宰相は秘書に目配せした。

「帝国で人気の演劇家が書いた本に出てくる種族です。魔法にも通じているとか。吟遊詩人なら半獣半人の種族に詳しいでしょう？」

「ケンタウロスとかでしょうか？ならばある程度」

そもそも楽器をもたらしたのは彼らだと言われている。今でも南東の一部で住んでいるというが。

「実在の種族に混ぜて創作の種族も出ているから、あの子が思い違いをしたのでしょうかね」

迷惑な話だ。

本音を堪え、首を傾げる。

「それで、私が何の関係があるのでしょうか？もしかして、王子の呪いが解けたんですか？」

「ええ」

さつきから背中がむずむずする。やはりあの寝台に虫が湧いていたのだろうか。

温泉に入りたい。

「えっ？」

「正確に言えば、王子の呪いが変わりました。誰かが呪いを解こうとしたのです」

喋っている表情に、微かな嫌悪が浮かんでいる。

「えー……お酒で呪いは解けませんよね？」

「だからあなたに尋ねているのです。呪いを解こうとして、呪いが悪化する可能性もありえたわけですからどんな事も確認しなくては」

王子殺害未遂疑惑を掛けられていたのか。

「申し訳ありませんが、私に思い当たる節はありません」

宰相は頷き、両手をテーブルの上で組み合わせた。

「あなたに非があるかと無かろうと、王子の呪いに関係し

ていた可能性があります。ですから、私は王家の人間とこの国のために、これから起こりうる悪い可能性は排除しなくてはいけません」  
つまり。

「こちらの都合ですし、個人的な償いもこめて少々包みました。馬車で隣国との要所まで送りますよ」

余計な事は黙って、さっさと出て行けと。

「わかりました」

食い下がる必要は、無いだろう。

「王子にご挨拶は」

「恐らく、誰とも顔を合わせたくないと思います。いつもそうです。呪いが変化した直後は」

アダンさんも複雑そうな表情を浮かべているので、それはこれまでの経験がそう言わせるのだろうと思った。

昼過ぎに出る事になり、多少荷物を纏める猶予をもらえた。

とはいえ、殆ど身一つ。

少ない時間を過ごした部屋を出て、王子の部屋まで向かうと、廊下でベルさんがお茶一式を持って肩を落としているのが見えた。

声を掛けると、アダンさんのように複雑な表情を浮かべている。

「せっかくご飯を食べて下さるようになったと思ったのに、部屋にも入れてもらえなくて」

「すみません・・・私が何かしたせいで」

酷い言葉を投げる代わりに、ベルさんは私の肩を叩いた。

「大丈夫。今までも何とかやってこれたし、あなたのせいじゃないわ。これから頑張ってね」

「はい」

頭を下げ、別れを告げる。

私は廊下に腰を下ろし、リュートを取り出した。

部屋に入れないなら、せめてこれくらいは。

長くも短くも無い別れの曲が奏で終わる頃、奇妙な音が聞こえ、思わず指を止める。

ずずっ　ずずっ　と、まるで何か大きなものが体を引きずりながら近づいて

背を凭れていた扉が内側に開き、私は王子の部屋に転がり込んだ。リュートを抱えたまま転がっている私と、見下ろす王子の目が合う。

「大丈夫か？」

「え、ええ、あの、王子のほうこそ大丈夫ですか？あのすみません私、全然覚えていませんが、呪いが変わってしまったようで、お加減の方はいかがでしょうか？」

じたばたと姿勢を変える。

「大変申し訳ありません」

「やめろお前が悪いわけじゃない」

土下座する私を起こそうと肩を掴む王子に、柄にも無く感情がこみ上げてきた。

「けどっ王子はあんなに沢山の方々に心配されて、大事に思われているのに！私のせいであつ」

「いやちがつっ！こら泣くなっちよっ！アダンっ何とかしてくれっ」

涙を止めようと、鼻を押さえる私の背後に長い影がさす。

「いーけないんだいけけないんだー 王様に言ってやるゝ 子供泣かしますかフツー王子なのにプフッ」

楽しそうな声色に嗚咽が止まらなくなってきた。

「アダン、何騒いで・・・王子、何をなさったんですか？」

「ち、違いまづ・・・私が・・・ひくっ・・・っ・・・」

泣くのなんて、何年振りだろうか。困ったな。

人の気配が増えているのが判り、落ち着かなければと言っ気持ちちが中々固まらない。

「大丈夫？泣かないで。王子・・・子供泣かすなんて、最低ですよ。引き籠もりの分際で」

後半は小声だったが、ベルさんの声はばっちり聴こえてしまった。弁解しなくてはいけない。

「違います。王子は悪くないです。私のせいで、また別の呪いになっってしまったって、精神的に打撃を・・・ごめんなさい」

誰かが手巾を渡してくれたので、それで涙を拭く。

「でも王子の呪いが変わったのって、これで何回目だ？」

誰かの言葉に王子の体が強張るのが見えた。

扉の影で王子の姿は、彼らからは見えないと思うが、何年も引き籠もっていたと言う話だから、

王子にとってはかなり大人数に感じるのではないだろうか。

何か言わなくては。

服の袖でごしごしと顔を擦り、なんとか涙を止める。

「あのですね、自分の体がよくわからないものに変わるって、凄く恐ろしい事だと思います。

自分の精神まで変化するんじゃないかと不安になったりとか、凄く勇気がある人でもないと、到底耐えられないと思うんです！」

よし言えた。

唾を飲み込み、王子の顔を見つめる。

「伝承などでは、本当は心までは呪われていないのに自暴自棄になっただけ結果、心まで怪物になっってしまう人物もいますが、王子はそん

な人ではありません！

凄く優しいし、国の事もちゃんと考えていらっしやるし、王様や叔母上の事も心配してるしっ超いい人なんですよ！呪いなんか全然負けてないんです！」

一気に言い切って、息を吐く。

喉が痛い。

「王子の呪いは、いつかきつと解けますから、それまで諦めないで下さい」

それではお世話になりました。と言って、立ち上がるうとしたら足がもつれた。

手が空しく宙を搔く。

このままこけたらリユートが壊れる！とっさに抱え込み、顔面から床にぶつかると思いきやその前にもうちょっと柔らかいものに当たった。

べちっ という、割と間抜けな音。

鼻ぶつけた。

なんとなく違和感のある感触に思わずぺたぺたと触る。

鱗だ。丸太のような鱗のある長いのにシーツが巻きつけられ、見上げた先は、王子につながっていた。

王子は、呪いが変化して

「王子、今度は蛇になったんですね」

王子は無言で唇を噛んでいた。

「まるでナーガ族ですね、あの人達、超いい人ばかりですもんね。良かったですね」

思わず手を掴んでアダンさんのように上下に振る。

「良かったですね！犬とか猫とか牛とかだとコメント困りますが、山羊や蛇なら呪いというよりむしろ祝福ですよー！」

手を離してベルさんの手を握る。

「やりましたね！きつとすぐ具合良くなりますから！もしかしたら魔法も使えるようになるかも知れません！良かったですね！」

ベルさんの長い睫が上下し、柔らかそうな唇が動く。  
白い顔が戸惑った表情を浮かべていた。

「そ、そーなんだ？」

ああ、そうか。ナーガ族はここからずっと離れた西方に住んでいるから、見たこと無いに違いない。

「ええっそんなんです！近所にも武者修行で来ていた人が居ましたが、超いい人でしたし！」

一人で言っていると、深刻そうな表情を浮かべた野次馬達が各所

で議論を始め、アダンさんはどこかへ行ってしまった。

後姿をベルさんで見送っていると、つんつんと背中をつかれ振り返る。

「あ、すみません王子、私そろそろ出て行かないと」

いけないいけない。

王子も戸惑った表情を浮かべ、困ったような口調で言った。

「さつきから話が見えないのだが、少し、待て。何故お前が出て行くんだ？」

話が、見えない？

「え、私が出て行くのは王子の呪いの変化した理由が不明で、可能性があるのは私が何かしたからで、もしかしたら何かやらかして王子の呪いが悪化したら困るからです」

王子は沈黙し、自分の蛇の下半身を見つめた。

「お前は、これを呪いではなく、祝福だといったじゃないか」

「そうですね」

「悪化してないな？」

「全然悪化してませんね。ウチの近所でそういう子が出たら一族総出で三日くらい大宴会です」

「お前に出て行くよう言ったのは誰だ？」

「宰相様です」

「ベル、執事を呼んで来くれ。ブランカ、アウグスト喧嘩をやめてこの体に合う服と移動用の椅子を。あと誰かアダンを殴ってきて良  
いぞ」

王子は私の頭を優しく撫でた。

「こいつを風呂に連れて行ってやってくれ。あと服もだ」

別人のようにきびきびと指示を下す姿をあっけにとられたままみ  
ていると、王子は優しい顔をして私を見た。

「ありがとう」

王子は笑うと大変な美形である事に、私は今更気がついた。

大臣の奥方 前編（前書き）

番外

## 大臣の奥方 前編

私はベガルデューモ神聖帝国から見るところのフス地方にあるルストウリアスという山々に囲まれた小さな国の大臣の伴侶をやっています。

ベガルデューモ神聖帝国というのは、このファン大陸の東部の大半を支配しているわけですが、皆様正式名称をめんどくさがって「ベガ帝」とか「帝国」と略してと呼んでいます。

話がずれました。

つまり、私の夫は小さな国の中間管理職として上に王様、宰相、下には將軍や事務方の人々などに挟まれ、トリガラのように絞られて生活しています。

元々は騎士の家系でありながら頭脳面のみ秀でていたので時の女王様が当時の大臣に口添えして下さり、養子として迎えられ、喜びのあまり大臣の書齋という名の個人図書館に半年ほど引き籠もり栄養失調で死に掛けたというあほな伝説を持つ可愛い人です。

何の因果か、息子達は祖父や伯父達そっくりの脳筋になってしまいましたか……。

食費が大変です。

ですが、優しい子達になってくれたので良しとしましょう。

そんな事を考えながら一人微笑んでいると、向かいに座り書類に目を通していた夫が、人によっては眼光鋭く、心の底まで射抜くような眼差しを投げかけてきました。

「奥方様は、随分と機嫌が良いね」

「ええ、今日の占いに『悩みが解決する』という卦がでてましたの。貴方に」

真つ赤になつて俯く年下の夫を眺められるのは私と隣に座る無口な侍女だけの特権ですから、存分に堪能します。

「いい腰痛のお薬が手に入ると良いですわね」

それとも、最近のご無沙汰のあちらの方かしら？などと私が考えていると、不意に馬車が傾ぎました。

市中の為、あまり速度は出していませんでしたが、それなりの勢いがありますので座席から滑り落ちた私に夫が手を差し伸べます。

私は微笑み、夫の手を握りました。

「何事かしら？」

「ジューガのいつもの嫌がらせかも知れないね」

我がルストウリアスの隣国、ジューガとは長年、外交テーブルの下で足を蹴り合う仲ですので、こつやつて会議の為訪れれば、適当に嫌がらせをされます。

もちろん、我が国にジューガの使節がやって来れば適度にお返ししますが。

「サリー、大丈夫？」

無口な侍女は私のドレスを軽く叩き埃を落としながらにこりと微笑みました。

「大丈夫です奥様」

こういっ子が娘に欲しいわー。

と柄にもない事を考えしていると、御者がこちらに回ってきました。

「旦那様、申し訳ありません。車軸が折れてしまったようです」

御者がそう告げると、夫は仕事用の厳しい顔を作ります。

仕方なく、私は手を放しました。

私達の邪魔にならないよう大半の召使達は別の馬車で宿に戻っていますから、今日はもう宿へ戻るだけです。からそう急ぐ事ありません。

厄介ごとは殿方に任せる事にし、私達は座席に戻り、カーテンを少し開けました。

下町の雑多な風景は、山がちなルストウリアスに慣れた目には珍しいものです。

窓を開けると、柔らかな音色が聞こえました。

季節にそぐわない、春の喜びを表す曲です。

音の主は

居ました。

しかし、この素晴らしい音色を奏でているのが本当にこの人物なのかと思わず目を疑います。

何日どころか何ヶ月も体を洗っていないであろう垢塗れの顔に、元の色もわからないような汚れた髪。溝で洗ったような衣類を身につけ、手足のほとんどは剥きだしのまま汚れ真っ黒です。

このような姿では、いかに素晴らしい曲を奏でようと客が寄りないであろう事は明白でした。

「ちよつとアナタ。何考えてるの」

返事はありません。

「リユートのアナタよ。ちよつと聞きなさい！」

「奥様」

あらいけない。

思わず声を荒げてしまいました。

しかしその甲斐あって楽器を弾く手が止まり、纏れた髪で隠れた

顔が左右を見ました。

「こつちよ」

まっすぐにこちらを見据えても、表情はほとんど見えません。

「季節を考えて、秋の曲にしなさい」

こちらに向けられた手のひらが妙に白くて目を引きます。

「白銅貨一枚でいいよ」

しゃがれた痛々しい声の中にどこか不思議な響きを持つ言葉が返ってきました。

「どこの出身でしょう？」

私は窓から身を乗り出し、半銀貨を見せると片手で手招きしました。

一瞬躊躇ってから近寄ってきたので硬貨を手の上に落とし、訊ねます。

「アナタどこの生まれ？この辺りでも南方でもないわね」

「西方の海を越えた所から」

帝国の国境は西は砂漠によって隔てられ、砂漠の向こうには興国という小さな国々の連合体があります。

その先へもつと行けば、大きな海があります。

帝国内部にもいくつか外海へ通じる小さな海がありますが、それらとは比べ物にならないとか。

話半分に聞いたとしても、相当遠方だと言つのは確かです。

「もしかして、腰痛に効く治療法とか知ってる？」

半銀貨と私の顔を交互に見て、雑巾の塊みたいな頭が傾ぎました。

「温泉、薬草風呂、湿布、按摩、針、あと話では、暖かい岩の上で体を休めるといいと」

さかんに裾を引くサリーに根負けし、体を馬車の中に戻すと珍しく彼女は困った顔をしていました。

「一応、身分の事などありますので」

そう、ここは我が国ではなく、身分制度やり過ぎてすべてにおいて末期的腐敗状態のジューガ。

そこで一応貴族の身分の私が路上芸人と普通に会話すると、厭味の種を生むだけになってしまいます。

でも・・・

「じゃあ、サリー伝言をお願いします。夕暮れまでに石馬亭に私宛に来るようにつけて」

ここからそんなに遠くは無いから、夕食までには色々話を訊く事ができるだろうという算段です。

それまでに、私も宿へ戻れるでしょうしね。

外では下男と御者と夫が顔をしかめているのが見えました。

## 大臣の奥方 後編

宿で食事を取っていると、涼やかな秋の曲が微かに聞こえてきました。

ジューガ料理は、数少ないこの国の美点です。

贅沢に使われた香辛料で複雑な味わいの真っ赤なスープ。

芥子の練りこまれたふつくらとしつつピリツと辛いパン。

食欲を刺激する香草と共に燻された子豚の丸焼き。

ただひとつ残念なのは、夫の好みではないことくらい。

今も眉間に皺を寄せ、パンを干切っています。

この人のこういふ子供じみたところも可愛いのよね。

傍から見れば、人相の悪い男が何か悪事を企んでいるように見えるのでしようが。

「この宿では楽士を雇っているようだが、ここには来ないのかね？」

分厚い扉に目をやり、夫が給仕に尋ねると給仕はふるふると首を横に振り、サリーと見習い家令が意味ありげに目を合わせているの

で、私も内心首をひねりました。

「あなた達、何か知っているの？」

二人が嬉しそうに微笑みます。

「外で一曲弾いてもらうよう手配しました。旦那様も奥様も音楽が大好きですので」

ここ十数日に卓上での戦争を潜り抜け、夫はまた少し痩せました。

今回この国に来て、初めてで、最後の二人きりの食卓です。

他人の居る前では、夫は理知的で冷酷に見える表情を崩さない。

だから私が代わりに微笑むのです。

「ありがとう。とても嬉しいわ」

つつがなく食事を終え、寛いでいると侍女がそつと耳打ちしてきました。

眉を顰め、思索してもよい解決法が思いつかず、夫に頼る事にします。

「貴方、夕食の時素晴らしい音楽を聞かせてくれた楽士をここに呼びたいのですけど、その子、身分の問題でここまで入れないそうなの。どうしたら良いかしら？」

あの芸人は。夕暮れ前にはここへ着ているはずでしたが、宿に入れず往生しているのをサリーが見つけた、音楽を依頼した。という事でした。

「そんな事か。ヘルマン、ここまで通してくれ」

「はい。旦那様」

見習い家令のヘルマンが一礼し部屋を出、しばらくしてボロ布の塊と非常に嫌そうな顔をした宿の亭主を連れ戻ってきました。

太った亭主は恐らく、汚されるのが嫌なのでしょう。

しきりにお世辞を述べつつ、物乞いの類を入れるわけには行かないが特別にということを重ねて強調してるため、侍女が小金を包み黙らせました。

しかし、夫も、あまりのボロ布ぶりにややおののいた様子でした。

しかも室内だとわかるこの異臭。

ヘルマンは平静を保っていますが、目元がやや引きつっています。

私は扇で口元を隠し、サリーを見やりました。

驚いた事に微笑んでいます。

「奴隷で、異民族なんだそうです」

帝国及びジューガ国では奴隷制度が存在しています。

しかし、国内に住んでいる今の若者達は、奴隷と言う存在を見たことも無いはずですよ。

今は亡き女王と私達で、廃止しましたから。

完全に。

そこまで考え、ふと漠然とした予感を感じました。

「貴方、この奴隷、買い取ったらどうかしら？腕が良いし、損ではないしそれに」

まあ、買い取っても奴隷は国内に入った時点で奴隷ではなくなるわけですが。

「私、曲の続きをもっと聞きたいわ」

あの頃　あの勇敢で凛々しい女王がいた頃、城には素晴らしいテノールを聴かせてくれる吟遊詩人と機知に富んだ冗句を口にする小柄な道化がいて、腕白な王子と女王を支える王の姿がいつもありました。

けして我が国は、富んでいるわけではありません。

資源といえば、鉱物と林業、少しの酪農、それでも何年もかけて私達は　人々が飢えないように、身を売らずに済むにする努力を続けて……。

そうやって良くなる矢先だったのに、春の前にカサンドラは逝ってしまった。

ならば、せめてカサンドラの大事な息子に、あの春の歌を聴かせてあげなくては

奴隷は案外安く買い取ることが出来ました。

帰国し洗ってみれば、異民族といえど、普通の子供とほとんど変わりありません。

耳が尖っているのは、部族の風習かもしれないと思いつねずにおきます。

実際洗った侍女、確かアマンドが言うには半日掛かりだったそうです。

鳥の巣のような髪を解すよりも、切って洗った方が早いというので、まるで厨房の雑用係くらい短い髪になったのもご愛嬌。

痩せた首元が寒々しく、息子達の為に仕立てたものの、成長に追いつかず数度しか腕を通さなかった秋物の服を着せると丁度よい具合です。

顔立ちも整っているので、どこかの貴族でもおかしくないふうに見えます。

小奇麗にした姿を夫に披露すると、珍しく困ったような表情を一

瞬浮かべました。

「少し、髪が短すぎでは？それにこの服は」

夫は、息子達は知らないかもしれませんが結構、子煩悩。

まさか服まで覚えていたなんて、

「もう着る人も居ないし、丁度いいでしょう？髪はちょっと切りすぎましたわね。サリーちよつと不器用だから」

本人は、夫と私を青い大きな瞳で交互に見つめるだけで口を閉じています。

子供とは思えないほどの落ち着きぶりです。

「あなた、下がっていいわ。またお願いする時はよろしく頼むわね」

「わかりました。奥様」

しゃがれた声だけが、本当に残念。

「吟遊詩人として色々な屋敷に出入りしていたみたいだけど、喉を潰されてしまって路上芸人に落ちぶれてしまったんですって」

複雑な経緯を省いた説明に、夫は軽く頷きました。

腕前に関しては、既に幾度か部屋越しに聞いているので何の反論も出ません。

「あの子、王子の傍に置いてみたらどうかしら？話した感じではあまり宗教心もないし、王子の話し相手にはなるとおもうの。少なくとも、城の人では遠慮するし、外国人でも帝国派ばかりでしょう？」

王子が魔女に呪われ喜んだのは、皮肉にも魔女を迫害する立場の教会でした。

古代から続く祖霊達を崇拜する部族の集まりである我がルストウリアス。

帝国に膝をつく立場である以上、帝国の国教であるジユニ教を受け入れてはいますが、教義が国の習慣法と異なる事に関しては習慣法を優先すると定めたのは女王でした。

当時の教会側の反発は相当なものでしたが、帝国内で内乱が起こった際、皇帝側で多くの手柄を立てた女王には何の咎めもなく。

しかし、その遺恨は、見えない形でずっと残っていたようでした。

不信者に下された天罰だと。

血で穀物を買うような獣のような国には、獣の姿をした王子が相応しいと。

何度となく、謗られ嘲笑されたか。

血統による求心力を持たない王と、呪われ身も心も弱っていた歳若い王子、亡き女王の妹で遊学中のアンヘリカ姫の三人しか王族は残っておらず。

アンヘリカ姫が婚姻相手を探しに行くとは出奔してから早二年。

ゆっくりと衰退していくこの国を手をこまねいて待つわけには、  
いかないのです。

何か変えなくては。

「明日、連れて行ってみよう。もし駄目でも、収穫祭のあとは冬だ。  
楽土が居れば、夜が短くなるだろう」

夫がゆっくりと頷き、話がまとまりました。

翌日、夫が出仕するのを見送ったあと、サリーが差し出したの  
は、一通の手紙でした。

「奥様、これあの子からです、字が書けないというので、私が代わ  
りに」

開くと、腰痛の様々な治療法、中には知っているものもありまし  
たが、ああ、そういえば、コレが知りたくてあの子を。

すっかり忘れていた自分に、歳を実感します。

しかし落ち込んで仕方がありません。

第一、悩むと皺が増えます。

「この薬湯呂はよさそうね。早速材料を用意して頂戴」

細々と指示していると、下働きの侍女が不安そうな面持ちでこちらを見ているのに気がつきました。

「どうかしたの?」

アマンダは複雑な表情を浮かべています。

「あの奥様、今更申し上げるのもどうかと思うのですが、あの」

ひどく言い難そうにちらちらこちらを見上げ、おもいきって口を開くと

「あの、皆様勘違いされているようなので、あの、あの子、あの、女の子なんです」

風で扉がゆれるガタガタという音が良く響きました。

風呂で汚れを落とす前に髪を短く切ったのはサリーです。

息子の服を用意するよう言ったのは、私でした。

奴隷の持ち主と話したのは夫でしたから、きっと知っていたに違いありません。

私とサリーは思わず顔を見合わせ、どちらともなく笑いだしました。

「とりあえず、このことは伏せておきましょうか」

「なぜででしゅっ？」

「決まっているじゃない。その方が面白そうだからよ」

## 閑話

王子が部屋の外へ出るようになって、十日ほどたった。

当初は、動き回るアダンさんの後ろについて出来る事を手伝っていたが、人材の手配が終わったのか、現在王子の背後には従者見習いとして二人の少年がついて回っている。

おかげで物の上げ下げにも複数の手が加わり、あまりやる事が無い。

ひたすら近くで品のいい曲でも鳴らしていようかと思ったが、一日やって飽きた。

誰もリクエストしてくれないし。

最近、朝起きて身繕いしてから調理場へ行つて手伝い朝食を食べ、片付けをしてから王子の部屋へ行き、朝食に付き合ひ、従者見習い達が来たら部屋を出る。

大体掃除か洗濯を手伝い、それから調理場へ行き、昼食用の冷物を準備を手伝う。

昼は時間が定まっておらず、使用人達用に食堂に用意されているので軽く食べて一曲していると、大抵アダンさんに連れられ王子のところへ行く事になる。

王子は書類を裁いたり、陳情を聞いたりするのに忙しいく昼食を忘れがちなので、私がバスケットにたっぷり詰めて行かなくてはい

けない。

アダンさんが飲み物を、私がバスケット二つ、給仕が移動式食卓を押して、王子が大臣に囲まれてようが陳情のために人々が列を作っているようがとり合えず食事の準備をする。

移動式の食卓を王子の横にくっつけ、従者見習い達が書類を片付ける。

書記の筆も片付け、陳情の人々が居れば彼らにも軽食とグラスを渡す。

衛兵達は交代したばかりなので、我慢してもらおう。

書記は昔から仕えていたと言う中年の女性で指先がいつも真っ黒なので、お手拭を多めに用意しなくてはいけない。

全員に何かしら行き渡ったら、甘いゆるやかな曲を奏で、食事が終わるのを待つ。

一曲終わる頃には、朝から陳情する為に待っていた人々の表情も少しほぐれ、軽い笑い声すら聞こえるようになっていく。

概ね、財産争いや水利権、家畜の所有権、鉾山での待遇改善や事故、事件に関してや、果てには離婚問題で持ち込まれて大変だ。

場合によっては歴史家に学者、それに引退した事務官や古参の騎士が呼ばれ対応策を考えたりする。

充実感を感じつつ、片付けを手伝い調理場で皿洗いをしたあと、

ゆっくり食事をする。

料理番がマカナイテーシヨクというのをくれるのだが、凄く美味しいのだ。

夕食の仕込みを見物しながら一曲奏で、お茶の道具を運ぶベルさんに着いてき、おおむねの執務を終えた王子のところへ行く。

お茶を飲みながら、学者と大臣とどこかの部族長とかで、来季の政策の打ち合わせを行ったり、噂話をしたりする。

時々、私も意見を求められたりする。外国人なので、面白いらしい。

時々うちに来ないかと髭面で筋肉隆々の部族長達に誘われるが、今は王子の傍がいいと応えると何故か爆笑される。

解せぬ。

王子はまだ若いので、夕食まで勉強しなくてはいけない。

というか、引き籠もっていた間、部屋に教師が入れなかったのでほぼ独学でやってたそうなので、今はがっつりやらなくてはいけなくて、大変らしい。

ついでに私も勉強しなくてはいけない。

大きな部屋に礼拝堂のような長椅子と、それに合わせた長い机が備えられ、小間使いや雑用係、庭師見習い従者見習いなどなど、つまりは成人前の子供達が午前と午後、もしくは夜、三部に別れ、歴史、国語、算数を学ぶ。

本来、私が居るべきではないのだが、王子が構わないと言っているので一緒に勉強させていただいている。

私は帝国語が書けないので大変ありがたい。

教師役には、義足や義手をつけた老人達が交代で、それぞれ年齢の違う子供達に勉強を教えている。

ただひとつ問題があつて

「楽土来たのね！あのね、この耳飾どう？あげるからつけて！あとねっお姉さまのドレス持ってきたの！お兄様は嫌っていうけど似合うつと思つたの」

乳母が微笑ましい顔でこちらを眺めているのが、辛い。

大臣の娘、ビアンカは何が気に入ったのか家で家庭教師もいると  
いうのにわざわざここで勉強することにしたらしい。

今日は汚れてもいいように、簡素なドレス姿だし、根は悪い子ではないのだろう。

「耳を引っ張らないで下さい。物は頂けません。あと、他の人の勉強の邪魔です」

勉強の邪魔と言われて、ピアノ力嬢は顔を赤くしたまま大人しくなった。

首に腕を回されたまま、字をなぞる練習を続ける。

「それより、あとで素敵な曲を弾きますから、唄ってもらえませんか？みなさん歌お上手ですし」

隣に腰掛け、足し算と睨めっこしていた馬丁見習いが犬歯の抜けた顔でやっと笑った。

「もてる男はツライよな」

「そのの式、間違えてますよ」

その頃、王子は王様や来賓と晚餐を行い、夜更けに部屋に戻る。

私は夕食を食べたり、食堂で明るい曲を奏でたり片付けをしたりしている。

疲れた様子の従者見習い達が食事に現れたら、王子が部屋に戻ったという事なので、私が代わりに行き今日あった事や人気のある囁を話しながら、夜に相応しい曲を奏でる。

王子は、他の人々にあった少し楽しい出来事の話が好きだ。

だから時々私は結末を変える。

意地悪な継母は改心する。恐ろしい王は、悔い改め王子と和解する。

悲しい娘は死なず若者に抱きしめられ、幼子は、土の中ではなく、母の胸で眠る。

呪われた王子は、幸せな結末を望むただの優しい青年だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8072y/>

---

呪われてる王子様。

2011年12月20日17時50分発行